人麻呂歌集旋頭歌「天なる一つ棚橋」：七夕歌の世界とのつながり

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-01-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉住, 薫 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6605

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大妻国文　第49号　二〇一八年三月

人麻呂歌集旋頭歌「天なる一つ棚橋」

――七夕歌の世界とのつながり――

倉住　薫

はじめに

万葉集巻十一には、以下のような旋頭歌が収載されている。[1]

天なる一つ棚橋いかにか行かむ　若草の妻がりといはば足壮厳
天在　一棚橋　何将行　稺草　妻所云　足壮厳　（⑪二三六一番歌）

二三六一番歌は、「棚橋」を渡っての妻問いを歌う旋頭歌である。次歌の二三六二番歌の左注には「右の十二首、柿本朝臣人麻呂が歌集に出でたり」とあり、当該歌を含む二三五〇～二三六二番歌は人麻呂歌集収載の歌である。

当該歌は、茂吉評釈が、

この歌は、天在（あめなる）とあるけれども、必ずしも天上の牽牛織女に関係せしめなくともいいやうである。やはり民謡風で、気が利いて相当面白い歌である。

と述べるように、「天なる」という七夕歌を想起させる表現が詠み込まれ、同時に男性が川を渡り女性のもとを訪れる当時の婚姻習俗に根ざした相聞の旋頭歌としての一面を持っている。

本稿では、「天なる一つ棚橋」という通い路を歌った当該歌について、個々の表現を分析することで、七夕歌の世界との関わりを考察し人麻呂歌集の旋頭歌の発想の一端を明らかにしていきたい。

一　「天なる一つ棚橋」の情景

当該歌は、男性が「天」にある「一つ棚橋」を渡り女性の元に訪れようとする様子が詠まれている。「天なる一つ棚橋」とはどのような橋と解釈できるか考えてみたい。

「一つ棚橋」の所在によって、地上の橋を渡る男の歌ととるか、天上世界にある天の川の橋を渡る男の歌ととるかで解釈が分かれている。詞林采葉抄は「天の川棚橋渡せ」（⑩二〇八一）を挙げ「天河ノ橋」とする。仙覚抄は「天にある日とつゝけんためにいへり」、つまり「天なる」を枕詞ととり地上の橋するが、「天なる」に続くべき「日（ヒ）」と「一つ」のヒと同音であり、掛けたとしている。

金子評釈では「天に在る日の意で「ひ」の一音にかけ、それを「一つ」とつづけたのであるが、「天なる」はいかにも奇抜である」と、枕詞として捉えながらも、「天なる」の必然性に疑問を抱いている。そこで当該歌が、地上の恋を詠んだものであるか、あるいは天上の恋つまり七夕に関わるものであるのかについて、考察していきたい。

まずは、「ヒ」音に掛かる枕詞ともされる「天なる」の用例は以下の歌がある。

1　……竹玉を　間なく貫き垂れ　木綿だすき　かひなに掛けて　天なる　ささらの小野の　七ふ菅　手に取り持ち
　て　ひさかたの　天の河原に　出で立ちて　みそぎてましを　高山の　巌の上に　いませつるかも
（③四二〇番歌　丹生王）

2　天なる日売菅原の草な刈りそね　蜷の腸か黒き髪にあくたし付くな
（⑦一二七七　人麻呂歌集旋頭歌）

3　天なるや月日のごとく我が思へる君が日に異に老ゆらく惜しも
（⑬三二四六　作者未詳）

4　天なるや神楽良の小野に茅草刈り草刈りばかに鶉を立つも
（⑯三八八七　作者未詳）

1 2は「天なる」が「ささらの小野」「日売菅原」という地名に直接かかっている。1は、石田王の死に際し丹生王が詠んだ挽歌である。「天なるささらの小野」に生える「七ふ菅」を用い、「みそぎ」を行えばよかったという後悔が詠まれている。神事に用いる七つの節をもつ「七ふ菅」は、天上世界の「ささらの小野」に生えていると想像されたのである。2は人麻呂歌集旋頭歌である。女性の黒髪に塵が付くので、日売菅原で草刈りをするのを止めなさいという歌だが、「天なる日売菅原」とあり、当該歌と同じく「天なる」にヒの音が下接している。3 4は「天なるや」と間投助詞「や」が間に入り、「月日」「神楽良の小野」に続く。3は、天上に輝く「月日」と自身が仕える主である「君」とを重ね合わせている。4は1と同じく天上世界の「ささら（神楽良）の小野」が詠まれている。「茅草」を刈っていると「鶉」が飛び出してきたことへの驚きを歌う巻十六の「怕物歌」である。2の「日売菅原」は、4と同じく「草」を刈る場であり、天上世界に想像された場と解釈するのが妥当であろう。枕詞的用法の1 2の用例も、間投助詞をともなう3 4の用例も、「天」は天上世界の情景として描かれている。

これらの用例から、当該歌においても、「ヒ」に掛かる枕詞として「天なる」が機能しかつ、天上世界の「一つ棚橋」を渡る恋物語のイメージを喚起するといえよう。

加えて、逢瀬の際に渡る「棚橋」もまた、天上の恋と密接に結びついた表現である。当該歌以外に「棚橋」が詠まれたのは、以下の歌である。

5　天の川棚橋渡せ織女のい渡らさむに棚橋渡せ　（⑩二〇八一　作者未詳）

5は、彦星の元を訪れる織姫のために「棚橋」を渡して欲しいと願う七夕歌である。当該歌とは異なり、「天の川」を渡る主体は織姫だが、棚のように一枚板を置いただけの「棚橋」を天の川に渡すことが歌われている。一方、「橋」を渡すことが詠まれた歌を七夕歌には見出すことができる。

6　天の川打橋渡せ妹が家道止まず通はむ時待たずとも　（⑩二〇五六　作者未詳）

7　機の踏み木持ち行きて天の川打橋渡す君が来むため　（⑩二〇六二　作者未詳）

6は、七夕の「時」を「待たずとも」いつでも織姫の元へ通えるように「打橋」を渡して欲しいと願う彦星の立場の歌であり、7は、彦星を渡すために「打橋」として織り機の踏み木を天の川に架ける織姫の歌である。「打橋」とは、7で詠まれるように、踏み木となる角材のようなものを川に置いた「橋」であり、「棚橋」と同じく、架け外し可能な橋なのであろう。年に一度限りの逢瀬だからこそ、「棚橋」や「打橋」といった仮設の橋が必要であったのである。また、6・7の七夕歌は、ともに逢瀬のために橋を渡そうとする状況が詠まれている。七夕歌の中では、彦星は舟で天の河を渡ると歌

われることが多いが、このように仮の橋を渡る歌も見られるのである。

さらに「打橋」は、男性の逢瀬を女性が承諾することを示してもいる。

8　千鳥鳴く佐保の川門の瀬を広み打橋渡す汝が来と思へば　（④五二八　坂上郎女）

9　背の山に直に向かへる妹の山事許せやも打橋渡す　（⑦一一九三　作者未詳）

8では、川幅の広い「佐保の川門」にあなたがいらっしゃると思って「打橋」を渡す。9では、「背の山」と正面に向かい合う「妹の山」に「打橋」が渡してある。「事許せやも」とあるように、女性である「妹の山」が、男性の「背の山」を迎え入れたから、「打橋」を渡したのである。

このように、架け外し可能な「棚橋」や「打橋」を川に渡すというのは、女性が男性の逢瀬を迎え入れる用意が整ったことを示しているのである。

当該歌のように、天上の川に「棚橋」が渡されてあることは、女性が男性を迎え入れる用意が整ったということであり、天上世界の天の川に浮かぶたった一つのたった一晩限りの「棚橋」をどのように渡ろうか、と彦星が織姫との逢瀬を心待ちにしている様子が「いかにか行かむ」には詠まれているのである。

二　「足壮厳」の解釈

次に、下三句「若草の妻がりといはば足壮厳」について考察していきたい。

「若草」の「若」の本文「穉」は、西本願寺本「褆」、嘉暦伝承本・金澤文庫本・紀州本「褆」、細井本・大矢本・京都

大学本「穉」となっている。いずれも「穉」の異体字と見ることが可能である。「穉」は、小島憲之が指摘するように『篆隷万象名義』に、

穉　除致反　外麦也　幼稚也　小晩也

とある。[2]「穉」とは「稚」の意であり、「穉草」とは「若草」の意である。この「若草の」は、「つま」（夫・妻）に掛かる枕詞である。[3]

10　若草の新手枕（にひたまくら）をまきそめて夜（よ）をや隔（へだ）てむ憎くあらなくに　（⑪二五四二　作者未詳）

10の例では、新妻との共寝が「若草の新手枕」と詠まれており、「若草」のみずみずしく柔らかな様に新妻の若々しさが連想されていることが分かる。[4]

すなわち、当該歌は新妻の元へ訪れる際の歌として発想されたと捉えられるのである。

続いて、当該歌の第六句「足壮厳」について考えてみたい。この句の訓みには、以下のような異同がある。

a　アシノカサリヲ　古葉略類聚抄
b　アシノサカリヲ　嘉暦伝承本
c　アシヲウツクシ　西本願寺本・紀州本・代匠記・仙覚註釈
d　アシヨソヒセン（ム）　童蒙抄・総釈（春田政二）・佐佐木評釈・私注・大系・講談社文庫

e　アユヒスラクヲ　　万葉考
f　アユヒシタ、ス　　略解（宣長説「壮厳」を「結發」の誤りとする）
g　アユヒシタタム　　古義（「壮厳」を「帯發」の誤りとする）
h　フネヨソハクモ　　井上新考（「足」を「船」の誤りとする）
i　アユヒカタメム　　折口口訳
j　アシヤカザラム　　全註釈・茂吉評釈
k　アシヲカザラム　　窪田評釈・澤瀉注釈・全注（稲岡耕二）・全解・新大系・和歌大系
l　アシカザリセム　　全集・集成・新編・釈注・全歌講義

h「フメヨソハクモ」は「足」を「船」とし「船渡り」を想定する。f「アユヒタ、ス」は「壮厳」を「結發」、g「アユシヒタタム」は「壮厳」を「帯發」と、いずれも誤字説をとるが、写本にはhfgのような異同はなく、本文は「足壮厳」と認められる。[5]「壮厳」は「カザル」（ajkl）、「ヨソフ」（d）と訓むかで、説が分かれている。澤瀉注釈が指摘するように『類聚名義抄』に「荘」（僧上）に「カザル」「ヨソホヒ」の訓、「厳」（仏中）に「カザル」「ヨソフ」とあり、両訓に可能性がある。全註釈では「腰細に取り飾らひ（餝氷）」（⑯三七九一）の用例から、澤瀉注釈でも、西本願寺本金光明最勝王経（四天王護国品第十二）の「荘」「厳」に「カザリ」、斯道文庫蔵本願経四分律の「荘」に「カザル」とあることから、「カザル」の訓が適切であるとも指摘されている。この澤瀉注釈の指摘を受け、以降の注釈書の多くが「カザル」の訓を採用している。「壮厳」は仏典語であることからも、「カザル」と訓む蓋然性は高い。j「アシヤカザラム」k「アシヲカザラム」l「アシカザリセム」の訓みが候補として残るが、ここには人麻呂歌集略体歌の訓み添えの問題が生じる。全注（稲岡）は、l「アシカザリセム」の訓に関して以下のように述べる。

人麻呂歌集古体（略体―引用者注）短歌のコヒス、シニスが「戀為」「死為」と記されていることから考えて否定されるだろう。

人麻呂歌集略体歌の訓み添えに関しては、先行の研究によって、訓み添えの法則が明確になってきた。[6] 訓み添えの基準に照らすと、l「セム」の訓は該当しない。一方、「ヲ」は訓み添えが行われ易い助詞でもある。つまり、k「アシヲカザラム」の訓が最も適切といえよう。

次に、「足を飾らむ」の意について考えてみたい。略解は「足壮厳」をf「アユヒシタ、ス」と訓み、宣長説を引用し「人が妻許ゆくといひてあゆひし出立つよと也」とする。「あゆひ」とは「足結」、足を結ぶ紐のことであり、足元の準備をして出かける様子と捉えている。d「アシヨソヒセン（ム）」と訓む万葉集総釈も「足をしっかり準備していかう」とする。

一方、最も妥当性の高い訓k「アシヲカザラム」を採用する澤瀉注釈でも「足ごしらへをして行かう」とし、釈注もまた「一枚板の仮橋ではさぞ危険であり水しぶきを浴びるであろうという次第で、まずはしっかと足装いをしよう」と、「ヨソフ」の訓と同様に身支度を整える表現として理解する。足の支度を整える「足結」は、万葉集において以下のように詠まれている。

11　湯種蒔くあらきの小田を求めむと足結出で濡れぬこの川の瀬に　（⑦一一一〇　作者未詳）

12　朝戸出の君が足結を濡らす露原　早く起き出でつつ我も裳の裾濡らさな　（⑪二三五七　人麻呂歌集旋頭歌）

13　……食す国の　事取り持ちて　若草の　足結たづくり　群鳥の　朝立ち去なば　後れたる　我や悲しき　旅に行

く　君かも恋ひむ……　（⑰四〇〇八　大伴池主）

11には開墾地を探して川瀬で「足結」を濡らしたことが歌われ、12には朝早く出ていく男性の「足結」を露が濡らすことが歌われ、13には公務のため「足結」を整え朝出立することが歌われている。出立前に整えた「足結」は、水に濡れやすいものであった。

当該歌は「天なる一つ棚橋」を渡る歌であり、天の川に浮かぶ板を渡しただけの不安定な橋を渡る前にしっかりと足支度を整えたとも考えられる。しかし、問題となるのは「足壮厳」の文字からは「足結」の意味を導くことはできないことだ。仏教語である「壮厳」は、「壮」「厳」ともに飾るの意を持つ。窪田評釈は「あの妻の許へ行くのだ、足結を美しいものにして、おしやれをして行かう」と理解する。「足を飾る」という表現は、万葉集にはないが、以下の例が参考になるだろう。

14　足玉も手玉もゆらに織る服を君が御衣に縫ひもあへむかも　（⑩二〇六五　作者未詳）

14は、「足玉」と「手玉」が音を立てるほど揺らしながら彦星のための布を織姫が織っていることが歌われている。また、古事記には、以下の例がある。

15　宮人の　足結の小鈴　落ちにきと　宮人響む　里人もゆめ　（古事記歌謡　81番）

15は、穴穂御子に追いつめられた軽太子が大前小前宿禰の家に逃げ込み、その際、大前小前宿禰が舞を舞いながら歌っ

た宮人振である。宮廷に仕える「宮人」の「足結」に付けた小鈴が落ちてしまったが、「里人」は騒ぐなと歌われている。宮中にある人々は、足に鈴などの装飾品を付けていたことが分かる。また、埴輪から当時の大宮人たちの足装飾の可能性が指摘されてもいる。(7)

これらのことから、窪田評釈が指摘するように、当該歌は妻との逢瀬に当たって足飾りを付けて出かけることを詠んだ歌と考えられるのである。(8)

当該歌は、「棚橋」を男性が足に飾りを付けて愛しい女性との逢瀬に出かける歌であることを述べてきた。「天なる一つ棚橋」という天に架かる一晩限りの「棚橋」をめぐる逢瀬には、七夕歌の発想が背景ともなっているのである。

三　旋頭歌としての抒情

これまで、「天なる一つ棚橋」「足を飾らむ」の分析を中心に、当該歌が天上世界の逢瀬を背景としていることを明らかにしてきた。本章では、当該歌が人麻呂歌集の旋頭歌としてどのように位置づけられるかを考察する。

旋頭歌は万葉集に六十五首あり、そのうち人麻呂歌集の旋頭歌は、巻七の「雑歌」に二十三首、巻十一「古今相聞往来歌類の上」の冒頭に十七首が収載されている。歌数から見ても、人麻呂歌集は旋頭歌を考えるに当たって重要なものとなる。当該歌が位置する巻十一「古今相聞往来歌類」の旋頭歌の抒情性について考えてみたい。

旋頭歌は、脇山七郎によって以下の五形式に分類される。(9)

A　問答形式　　B　呼びかけ形式　　C　呼びかけ形式の変形

D　繰り返し形式　　E　その他

人麻呂歌集の旋頭歌の研究においても、脇山の五分類が稲岡耕二や島田修三によって援用されてきたが、[10] 諸氏によって、分類結果に相違が生じている。以下に諸氏の巻十一の分類を挙げる。

歌番号	脇山	稲岡①	稲岡②	島田
二三五一	B	B	B	B
二三五二		C		B
二三五三		E		E
二三五四		E		E
二三五五		E		E
二三五六		E		E
二三五七		E		E
二三五八		E	E	E
二三五九		E	E	E
二三六〇		E	E	E
二三六一		E	E	E
二三六二	D	D	E	D

脇山は、人麻呂歌集のすべての旋頭歌を分類していないため、所属が不明な歌が多いが、稲岡①②・島田の分類から、

人麻呂歌集の巻十一旋頭歌にはA「問答形式」がなく、Eが圧倒的に多いということが分かる。旋頭歌の発生を考えた時、A「問答形式」が最も原始的であり、B「呼びかけ形式」C「呼びかけ形式の変形」D「繰り返し形式」は集団歌謡を背景とする。[11] D「繰り返し形式」は、BCの集団に対する問答や呼びかけの際に表現が繰り返した形式と考えられる。さらにE「その他」は、個的抒情性の強い歌が多く含まれる。旋頭歌はおおむねA→B→C→D→Eの順に発展展開したと考えられる。つまり、人麻呂歌集の巻十一旋頭歌は、原始的口誦性からは逸脱し個別な歌への展開を見せていると言える。人麻呂歌集旋頭歌は、岩下武彦が「自らの抒情を自覚的に追求する文学的営為の中に旋頭歌をとり入れた人麻呂の意識」と指摘した〈人麻呂の文学的営為〉によって生みだされたのに他ならない。[12]

当該歌は、稲岡・島田によってE「その他」に分類される。だが、品田悦一は異なる見解を示す。品田は「主題―説明」の関係を旋頭歌の基本と捉え、従来のA「問答形式」を捉えなおし、当該歌も同質の旋頭歌と判断する。[13]

人麻呂歌集において、最も原始的なA「問答形式」に分類されるのは二首のみである。

16　住吉の小田を刈らす児奴かもなき　奴あれど妹がみためと私田刈る　（⑦一二七五）

17　水門の葦の末葉を誰か手折りし　我が背子が振る手を見むと我そ手折りし　（⑦一二八八）

ともに巻七に収載された二首である。16は、田をお刈りになる男性には奴がいないのかと問い、その男性が奴はいるが妹のために私田を刈っているのだと答える。17は、湊の葦の葉先を誰が折ったのかと問い、あの人が振る手を見ようとして私が手折ったと答える。16は、問いには「す」という敬語が含まれ、答えには含まれないことから、主体が異なる問答の歌である。17は、主体の転換を示す明確な表現はなく、自問自答の旋頭歌とも考えられる。この自問自答という「問答形式」は、当該歌でも指摘されることがある。窪田評釈は当該歌を「前半は自問、後半は自答で、旋頭歌の古い形を用ゐ

てゐるものである」とする。[14] また、品田は当該歌と1617の近さを、以下のように「主題―説明」の関係として捉え直す。[15]

冒頭に提示された主題について、それぞれ「賤かも無き」「誰か手折りし」「いかにか行かむ」という問いが発せられ、その問いにたいし「奴在れ（ど）」「我そ手折りし」「足壮厳せむ」という答えが与えられるのだが、説明の力点はむしろ「妹が御為と私田苅る」「吾が背子が振る手を見むと」「稺草の妻がりと云へば」にある……

品田は1617と当該歌を同一の構造をもつ旋頭歌として位置付ける。しかし、青木周平は、当該歌とA「問答形式」の歌との差異を以下のように述べる。

二三六一番歌の場合、「いかにか行かむ」という問いに対して、「足飾りせむ」は向かいあった答えにはなっていない。「どうやって渡ろう」と橋の渡り方を問うたのに対し、「しっかり足ごしらえをしよう（『新編全集』）「足を（玉などで）かざって行こう」（『全注』）という答えは、橋の渡り方というより「まずは…」と一呼吸おいて対応しているのであり、向かい合う関係性はよみとれない。

青木が指摘するように、当該歌をA「問答形式」と捉えると、問いと答えの対応にずれが生じる。そのずれは、品田が指摘する「主題―説明」の関係と捉え直したとしても、同様に生じる。従来、A「問答形式」とされる1617は、提示された「奴」「刈る」・「手折る」という問いに対して、同じ表現を繰り返して答えている。当該歌は、そうした繰り返しはなく、「いかにか行かむ」という問いに対して、その直接の答えをともなわず、「足を飾らむ」という逢瀬のための準備に言及される。やはり、A「問答形式」の1617と当該歌を同質の形式として捉えることは難しいだろう。当該歌の「いか

にか」という疑問の表現をもって、1617と同一に捉えることはできないのである。

旋頭歌の基本的な形式から逸脱した当該歌は、旋頭歌としてどのように位置づけることができるだろうか。

逢瀬の承諾を示す一晩限りの「棚橋」が天上に架かり、その「棚橋」を通い路としてどのように渡ろうかと問う。続けて、新妻のもとへ「足を飾」って行こうと言う。「棚橋」を渡るすべは答えずに、足飾りをして妻のもとへ向かおうとを歌う。暗闇の「棚橋」を渡る危険には焦点があてられず、新妻との逢瀬に出かけるいそいそとした心情を「足を飾」ろうとすることで歌うのである。武田全註釈では、男性の逢瀬へのこうした期待の情を以下のように指摘する。

妻のもとをおとずれる時の事を、仰山に歌つているのだろう。一ツ棚橋イカニカ行カムというのも仰山であり、荘厳の字を使つたのも仰山である。宮廷奉仕の身で、恋のために冒険をする気持ちが歌われている。

武田は、当該歌の大仰さから、宮廷人の恋を描く旋頭歌とするが、宮廷での恋愛とは限定できない。だが、こうした大げさな表現によって、二人を取り巻く世界がよりドラマチックなものとなり、逢瀬へ向かう男性の「恋のために冒険する」ような高揚した気分が浮かび上がるのである。

当該旋頭歌の問いでは暗闇で渡る不安定な「棚橋」を渡るという困難が示されるが、その困難の解決よりも「足を飾らむ」と逢瀬へのはやる気持ちが詠まれている。危険な通い路を渡る手段を聞く問いに対して、逢瀬への期待の情を詠む旋頭歌なのである。

当該旋頭歌が、天上の恋をモチーフとして発想されたことは、すでに述べてきた。当該旋頭歌が、七夕歌として詠まれたとは明言できないが、年に一度の天上での逢瀬という七夕歌の発想を背景に認めることができるだろう。このような七夕歌と人麻呂歌集旋頭歌との繋がりは、巻七の人麻呂歌集旋頭歌にも確認できる。

朝月の日向の山に月立てり見ゆ　遠妻（とほづま）を持ちたる人は見つつ偲（しの）はむ　（⑦一二九四）

この人麻呂歌集巻七旋頭歌は、「日向の山」に現れた新たな月を見上げ、遠く離れた地にいる妻を持つ人は自分と同じようにこの月を見ながら相手のことを思っているだろうか、という歌である。[16] この旋頭歌に関しては、以下のように述べたことがある。[17]

天上を見上げ、そこに浮かぶ月を同じく眺めるであろう第三者を想起し、託して、その存在に恋を描く。そこには天上を見つめ、他者の心情に託して思いを詠むという、七夕歌の発想が見出せるのである。

この一二九四番歌も当該歌同様、E「その他」の形式に分類される旋頭歌である。当該歌は、めったに果たすことのできない妻との逢瀬を、一年に一夜限りの逢瀬である七夕歌の世界に引き付けて詠んだ旋頭歌であり、一二九四番歌は、「月」を見上げ、天空の恋物語である七夕歌の発想と重ね詠んだ旋頭歌なのである。当該歌よりも一二九四番歌は、個的抒情に傾いた旋頭歌といえる。二首の人麻呂歌集旋頭歌が、七夕歌を背景とし、形式から逸脱した旋頭歌であることは偶然ではない。一年に一度の天上の逢瀬という壮大な恋物語が発想の基盤となり、新たな旋頭歌の世界が拓かれたのである。

おわりに

当該歌は、天上に架かる一晩限りの「棚橋」という通い路を渡り、新妻のもとへ「足を飾」っていそいそと出かけよう

とする男性の歌であることを指摘してきた。闇夜に川を渡るという逢瀬は、当時珍しいものではなかった。そうした地上での逢瀬を、天上での一年に一度の逢瀬という雄大な恋物語である七夕歌の世界に関連させて詠む。集団的口誦的とされる旋頭歌は、七夕歌の世界と結びつくことによって、当該歌のように「問答」という形式から逸脱し、個人の想いを詠む旋頭歌へと展開したのである。問いは逢瀬への困難が示されるが、その解決を示すことなく、「足を飾」ろうという逢瀬へのはやる気持ちが詠まれた。地上での困難を伴う逢瀬を背景としながら、天上の恋と繋がることで、通い路を渡る男性の喜びを歌うという、新たな旋頭歌の抒情性を獲得することとなったのである。

注

（1）万葉集の引用は『新編日本古典文学全集』による。私に改めた箇所がある。

（2）小島憲之「万葉用字考証実例（三）」（『万葉集研究』第四集、塙書房、一九七五年七月）
『篆隷万象名義』（『弘法大使空海全集』第七集、筑摩書房、一九八四年八月）

（3）「夫」に掛かる例……②一五三　倭太后、②二一七　吉備津采女挽歌、⑨一七四二　高橋虫麻呂歌集
「妻」に掛かる例……⑦一二八五　人麻呂歌集略体旋頭歌、⑩二〇八九　作者未詳　七夕、⑬三三三六　作者未詳、⑳四三三一　大伴家持　追痛防人悲別之心、⑳四四〇八　大伴家持　陳防人悲別情

（4）和歌文学大系は、毛詩小雅「彼ニ有リ不レ穫ラ穉」に「穉は幼禾なり」（集伝）とあることを受け、「穉草」を「若い稲」の意ととる。

（5）「壮」は嘉暦伝承本・紀州本・陽明堂本・大矢本・京都大学本による。古葉略類聚抄「莊」、西本願寺本「牡」、金澤文庫本・細井本・寛永版本「荘」とある。「壮」と「荘」とは通じる字体である。

（6）稲岡耕二『万葉表記論』（塙書房、一九七八年一月）
渡瀬昌忠『人麻呂歌集略体歌論上』（渡瀬昌忠著作集第一巻、おうふう、二〇〇二年九月）、『人麻呂歌集略体歌論下』（渡瀬昌忠著作集第二巻、おうふう、二〇〇二年十月）

阿蘇瑞枝『柿本人麻呂論考』増補改訂版（おうふう、一九九八年三月）

（7）増田美子『古代装飾の研究　縄文から奈良時代』（源流社、一九九五年三月）

（8）足の支度ととる注釈……万葉考（「アユヒスラクヲ」と訓む）・略解（「アユヒスラクヲ」と訓む）古義（「アユヒシダヽム」と訓む）・総釈（「アショソヒセム」と訓む）・佐佐木評釈（「アショソヒセム」と訓む）・沢瀉注釈・茂吉評釈（「アショソヒセム」と訓む）・全集・集成・新編全集・釈注

足飾りととる注釈……仙覚抄（「アシヲウツクシ」と訓む）・窪田評釈・武田全註釈・私注（「アショソヒセム」と訓む）・大系（「アショソヒセム」と訓む）・全注・全歌講義・全解・新大系・和歌大系

なお、代匠記・童蒙抄は「アシヲウツクシ」と訓み、「足を労る」と理解する。

（9）脇山七郎「万葉集の旋頭歌」（『万葉集大成』七、平凡社、一九五四年十月）

（10）稲岡耕二①「人麻呂歌集旋頭歌の位置」（『万葉集研究』三、塙書房、一九七四年六月）、②『人麻呂の表現世界』（岩波書店、一九九一年七月）島田修三「旋頭歌論」（『古代和歌生成史論』砂子屋書房、一九九七年七月）

（11）旋頭歌の発生に関しては、片歌起源やそれに反対する説など議論も多いが、本稿では立ち入らない。なお、発生論に関しては、岩下武彦「旋頭歌の始原」（『万葉集を学ぶ』七、有斐閣、一九七八年六月）などにに詳しく議論が整理されている。

（12）岩下注10論文

（13）品田悦一「人麻呂歌集旋頭歌における叙述の位相」（『万葉』一四九、一九九四年二月）

（14）私注も「旋頭歌本来の問答の形になつて居る」と当該歌の問答性を指摘している。

（15）品田注11論文

（16）一二九四番歌「朝月日向山」には「朝づく日　向ひの山に」の訓もある。

（17）拙稿「巻七の旋頭歌」（『柿本人麻呂　ことばとこころの探求』笠間書院、二〇一一年一月）